



九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No.196
2012(平成24)年 8月20日(月)発行

読書の秋です! 8月11日発行の **脱原発・自然エネルギー218人詩集** という新刊の中から

◆◆◆◆
齋藤 久夫(さいとう ひさお)
1945年、福島県生まれ。詩集『黒船前後』『最後のシネマ』。日本現代詩人會
所員。福島県南相馬市に暮す。

通過するバス

スクールバスではない
市の借り上げたバスに乗って
生徒ではなく
学校が丸ごと移動していた

小高中学校が原町第二中学校が
石神中学校が移動していた
圏内から遠ざかる北の方へ
たとえば鹿島中学校へ

浪江高校は山の方を

双葉高校はどこを移動しているのか
普通列をなすのは生徒なのだが
災害派遣車両が列をなして走っていた
数を減らした原町一小の生徒たちは
始業式を鹿島小の廊下で挙行了した

午後30キロの圏内へ戻ってゆく
20キロ圏内の手前には

「立入禁止」区域の検問所がある
同心円の中心には近づけないままの
制御できない現代の城の廃墟がある

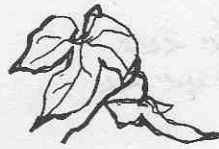
誰もいない

国境の検問所を

バスがそのまま通過したことが
あったように思う

思わず旅行者たちが拍手をした
こんな日もあります

みんなが笑った



そんな日はやって来るのか
城の廃墟を取り巻く円が解かれ
解放された検問所を通過し
旅行者ではなく難民が
黄色の花咲く緑の地に
拍手し笑いあう人々がバスから
降りてくる日はやってくるのか

わが浪江町

いつから福島がフクシマになったのか
うつくしまふくしまが
カタカナ文字のフクシマに。

福島県に私は生まれ育った。

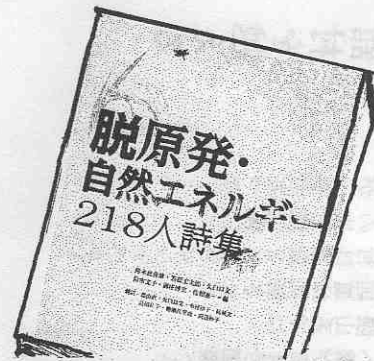
海があり 山があり

二つの美しい川があり
みどりの豊かな町だった。

なぜ そこを追われなければならないのか
答えてくれ

私は浪江町が好きだった。

誰よりも好きだった。
子どもの頃は魚つりをした。
鳥刺しをした。
山や川で遊んだ。



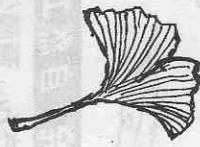
■脱原発・自然エネルギー
218人詩集 若松 丈太郎ほか(編)

脱原発に関わる詩の歴史の記録をめざして編まれたアンソロジー。海外の詩人を含む218人の作品を収める。福島県南相馬市に住む若松丈太郎は40年ほど前から、原発の危険性を詩や散文で訴えてきた。なかでも1994年の詩「神隠しされた街」は、福島原発の事故を予知したとされる作品だ。避難命令がだされ、住民が神隠しにあったように消えてしまった空虚な都市の情景を幻視している。英訳も収録。(コールサック社・3150円)

◆◆◆◆
根本 昌幸(ねもと まさゆき)
1946年、福島県生まれ。詩集『海へ行く道』『昆虫詩集』『昆虫物語』。詩誌「ゆすりか」「PO」、日本詩人クラブ所員。福島県南相馬市に暮す。

野原に寝ころんで
流れ行く雲を見た。
みんなみんな美しかった。
美しい心をしていた。
おとなになっても
純粹なままだった。
四季折々の花が咲き
人々は優しい気持ちをしていた。
わが浪江町。

この地に 一つの日に
必ずや帰らなければならぬ。
地を這っても
帰らなければならぬ。
杖をついても
帰らなければならぬ。
わが郷里浪江町に。



逃げる 戻る



わたし、わたしたちは逃げだした
 逃げなかった人、人たちがいた
 逃げだしたかったのに逃げるができなかった人、人
 たち
 逃げたくはなかったのに逃げざるをえなかった人、人
 たち
 逃げた人、人たち
 逃げなかった人、人たち
 それぞれに事情があつて
 それぞれの判断があつた
 それぞれの判断を許されない人、人たちがいた

わたし、わたしたちは戻つてきた
 戻つてこなかった人、人たちがいる
 戻つてきたかったのに戻ることができない人、人たち
 戻りたくはなかったのに戻らざるをえなかった人、人
 たち
 戻つた人、人たち
 戻らない人、人たち
 それぞれに事情があつて

若松 丈太郎 (わかまつ じょうたろう)

1935年 岩手県生まれ 詩集『いくもの川があつて』『魂舞する鷹』、『エッ
 セ』、『福島の復興』。詩誌『新現代詩』『いのちの聲』『福島自由人』。福島
 県相馬市に暮す。

それぞれの判断があつた
 それぞれの判断を許されない人、人たちがいる

メルトダウンした〈核発電〉施設から二五キロ
 わたし、わたしたちは求められるのだろうか
 それぞれの判断をふたたび
 あるいは判断を許されずに
 わたし、わたしたちはふたたび

昨年三月十五日、政府はわたしたちが暮らしている福相馬
 市など福島第一原子力発電所から二〇〜三〇キロ圏住民に
 「屋内退避」を指示した。その直前にわたしたち夫婦は福島
 市へ逃げた。一か月ほどで帰宅したものの四月二十二日、「緊
 急時避難区域」に指定替えし、九月三十日にその指定を解除
 した。しかし、〈核災〉は〈終息〉したと言える状態ではない。
 わたしたち住民は翻弄され続けている。

(『東京新聞』夕刊「詩歌への招待」欄・二〇一三年
 四月二十八日)

飯館村を越える

村人が 牛が去つた
 空洞の放射能危険区
 飯館村は線量2.39μシーベルト*
 浜の国道は遮断されて
 阿武隈山系では
 日常へ繋がる4号国道へと
 自動車だけがひっきりなしに
 無言で通り抜ける
 生物が一面びくともしない
 静止したモノクロの風景に
 特選リンドウが枯れた花畑
 身動きのできない現実を
 コスモスの色だけが乱れ咲く
 美しい村の飯館牛
 立て看板が美しかった地立つ

瓦礫の中を辿り着いた避難生活に
 突如現れたもう一つの壮絶な苦悩
 精神が号泣して粉碎する苛酷の時
 不条理のど真ん中をひた走る

浪江町7.8μシーベルト*1

齋藤 和子 (さいとう かずこ)

1945年 福島県生まれ 詩集『さるびあ』、『さるびあ2』『不物のアルバム』。
 詩誌『渚詩集』。福島県浪江町に暮す。

母の墓は立ち入り禁止区で
 母の命日 飯館をひた走る

孫娘は東京で一年生になつた
 富岡町4.6μシーベルト*1
 入学祝いのピアノが響く幻聴
 七五三参りの山津見神社
 祭を喪失した鎮守の森に
 一面黄色に咲くルドベキ*2
 もがれることなく熟した梅林
 飯館の彼岸前を折りてひた走る

相馬の女はいつも
 賢明に耐えて生きてきた
 「何事あつても たまげんでねえと」
 「たまげてねえで」
 「やることやつていくんだと」
 粉碎された骨片一つで
 故里の思想を聞く 飯館村を越える

*1 線量は2011年8月30日
 *2 帰化植物

脱原発・自然エネルギー218人詩集の中から
 松丈太郎さん、齋藤和子さんは、本会員です。

